

調査結果の報告

2012年10月に回答をお願い致しました調査の報告です。

先日は、青年期の友人関係と自己に関する調査にご協力頂きありがとうございました。

調査の集計がまとまりましたので、概要につきまして、ご報告させていただきます。

本調査は2012年1月から続けて実施しているもので、前回1月分として報告したデータにさらにデータを加える形で分析を実施しております。

なお、本調査につきまして、ご質問等がありましたら下記メールアドレスまでお寄せ下さい。

金沢大学人文学類

岡田 努

tokada@staff.kanazawa-u.ac.jp

方法

今回の調査では主に以下の内容についての調査項目から成っていました。

友人関係の特徴

- ・相手から傷つけられることを避ける傾向(傷つけられ回避)9項目
- ・距離をとってしまう傾向(距離確保)7項目
- ・相手に気を遣って傷つけないよう付き合う傾向(傷つけ回避)8項目
- ・友だちと円滑で楽しい関わりを持とうとする傾向(軽躁的關係)6項目

自己愛傾向

- ・評価過敏性(他人から評価されないのではないかと怯える意識)8項目
- ・誇大性(自分は特別な存在で他人より優れているという意識)10項目

ふれ合い恐怖:対人恐怖的な心性の一種で、関係が深まることに困難を感じて避けてしまう傾向

- ・関係調整不全(どうやってもうまく人と付き合ったらよいか分からず困ってしまう)7項目
- ・対人退却(対人関係全般から退いてしまう)10項目

そのほか、この尺度の検証のため「友人関係形成困難(12項目)」「対面不安(7項目)」という側面についても実施しました。

いずれも「全くあてはまらない(1点)」から「とてもあてはまる(5点)」の5段階を点数化しました。

調査に参加頂いた人数(有効回答数)大学学生および大学院生(1年生からM2)268名(男子105名,女子163名)18歳~26歳。

調査時期 2012年1月から10月

結果と考察

それぞれの調査内容の得点の男女別平均値をグラフ化したものを図1に示します。

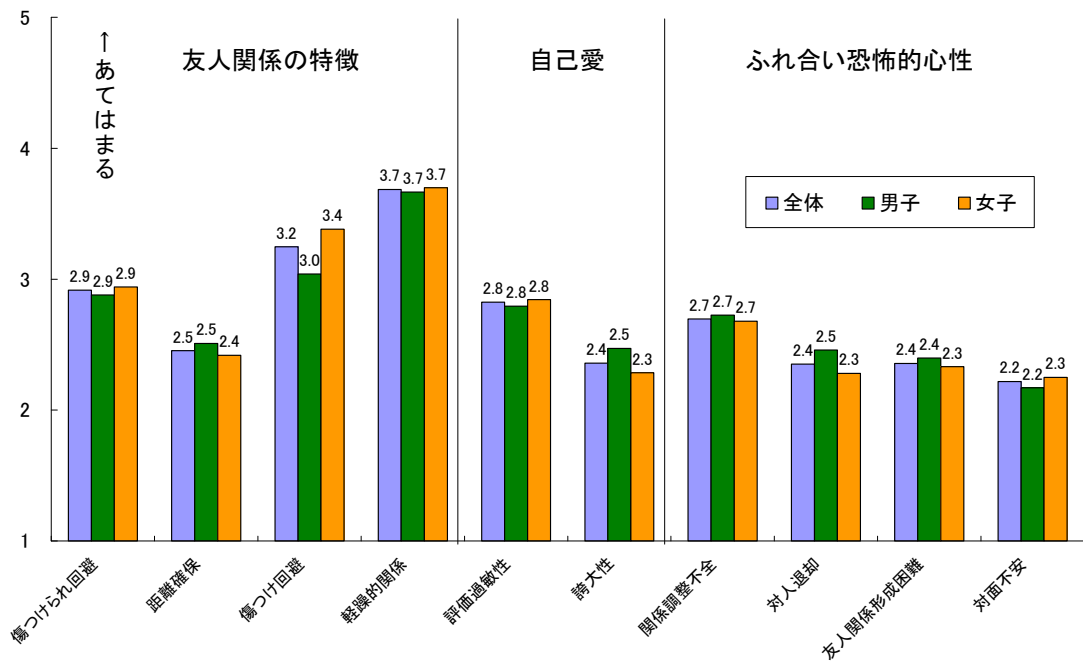


図1 各得点(項目単位)の男女別平均値

統計的には友人関係の傷つけ回避、自己愛の誇大性、ふれ合い恐怖の対人退却で差が見られました。すなわち女子の方が相手を傷つけない配慮をする傾向が高いこと、また男子の方が誇大性自己愛(自分を偉いと思う傾向)や対人的に引いてしまう対人退却傾向が高いことが分かりました。男子の誇大性の高さは別の調査とも共通する結果となっています。

次にこれらの要因間の関連について分析したものを図2に示します。

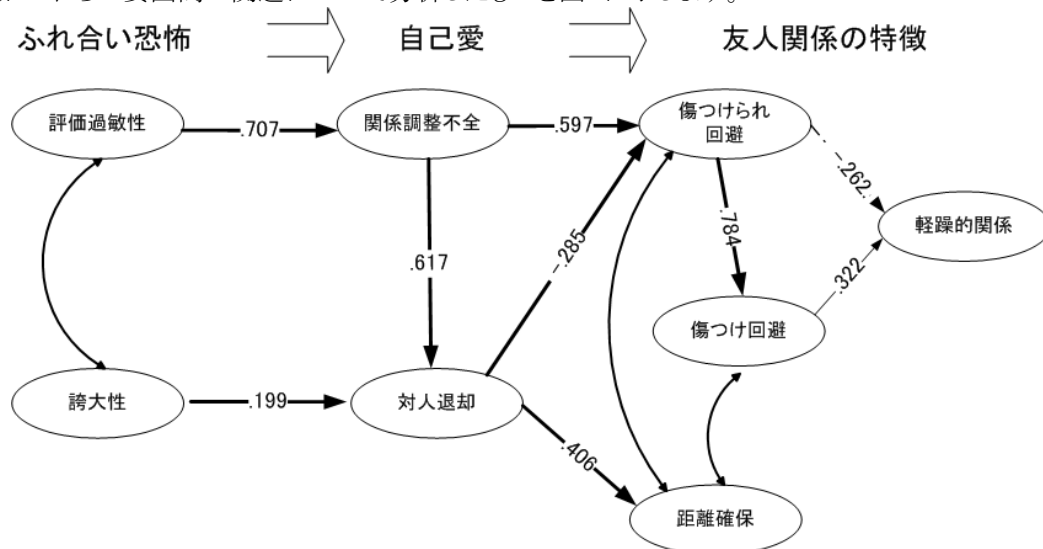


図2

図の数値は+1に近いほど、矢印の根元の効果が高いほど矢印の先方向も高まる影響力が強いことを示します。また-1に近いほど反対に根元が高いほど、先が低下する影響力が強いことを示します。

まず、ふれ合い恐怖は、自己愛のうちでも他者からの否定的評価を恐れる感情(評価過敏性)にもとづいて、ふれ合い恐怖のうちの、他者との関係における不全感(「関係調整不全」として感じられます。

関係調整不全のような否定的感情を解決するためには、1)他者との関係から退く(対人退却)を引き起こす方向、2)そのまま円滑な関係を維持しようと努力する方向の2方向があると考えられます。

1)の流れでは、ふれ合い恐怖のうち「対人退却」といった状態が発生し、他者との距離を置いて(距離確保)自分を守ることができます。なお「対人退却」は「関係調整不全」に加え、自己愛のうち、自分を偉いと思う傾向(誇大性)からも若干の影響を受けていることが見出されました。

2)の場合には、不全感を伴ったままのため、他者から自分が傷つけられる恐れからそれを避けようとする気持ち(傷つけられ回避)が生じ、傷つけられないようにするため、相手を気遣い、傷つけないように振る舞います(傷つけ回避)。そして、その結果、円滑な関係(軽躁的關係)が維持されるという流れがあります。

このように、ふれ合い恐怖的な傾向には、感情的側面である「関係調整不全」がもとになって、行動的側面である「対人退却」を引き起こしていること、また対人退却を起こさなかった場合に、表向き円滑な関係が形成されることが見出されました。従来「ふれ合い恐怖」と呼ばれる心理的特性にはこの2方向が充分区別されていなかったため、今回の結果は、このことについて新たな知見となりました。この結果は前回2012. 1月データで見出されたこととほぼ同様の結果であり、データを増やすことによって、より確かな結果となりました。

以上、現時点で分かっている分析結果を簡単にご報告致しました。今回のデータの一部は本年度開催される日本教育心理学会第54回総会で『青年期の「ふれ合い恐怖的心性」と「傷つけ合うことを回避する」傾向の関連について』と題して学会発表致しました。詳細な分析手順などはそちらの発表論文集にも掲載されております。